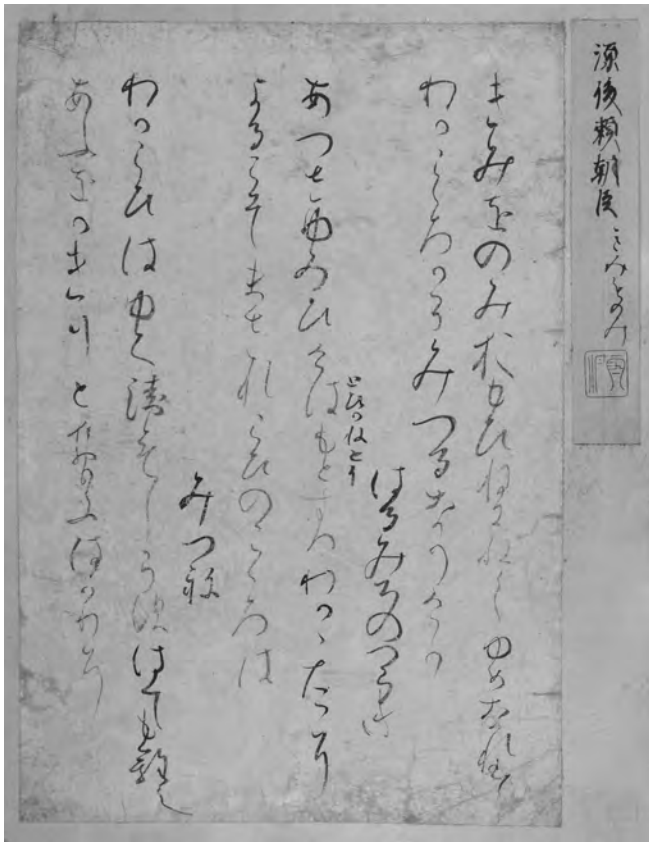


古筆手鑑



国文学研究資料館蔵 古筆手鑑 (表紙)
古筆切を貼り込むためのアルバム。

伝源俊頼筆民部切 (古今和歌集断簡)
古筆の鑑定家によって推定された筆者名は「伝称筆者」と呼び、通常「伝」を附して記す。名筆には「民部切」と呼ばれ、「高野切」といった固有名詞が附され珍重された。

日本には多くの古典籍が遺されています。それらは、書物そのものとして伝わるものもあれば、伝来の歴史のなかで筆跡の美しさを鑑賞するためにばらばらにされ、掛軸などに改装されてしまったものもあります。美術館などで展示される書跡の軸物には、もともとは書物だったものも少なくありません。書物を解体して美術品とするというのは世界的にも珍しいことだと思えますが、日本では室町時代ころから行われてきました。断簡になつてしまった古典籍は「古筆切」と呼ばれ、それを貼り込んだアルバムを「古筆手鑑」と呼びます。大きな手鑑ですと二〇〇点を超える筆跡を並べます。古筆手鑑は、文字どおり、古い時代の人々の手(筆跡)の美しさを鑑賞し、往古の人々に思いを馳せるために作られました。「見努世友」(出光美術館蔵)、「翰墨城」(MOA美術館蔵)、「藻塩草」(京都国立博物館蔵)など(いずれも国宝)、かつての用途を想像させる銘が与えられている手鑑も伝わっています。「翰墨」は書画、「藻塩草」は筆跡を指す雅語。国文学研究資料館に所蔵される古筆手鑑は、銘の附されない小さなもので、奈良時代から江戸時代までの人々が書写した書物の断簡や色紙など八十枚を収めます。手鑑の通例通りに、古筆切の脇には極札と呼ばれる江戸時代の鑑定家の鑑定書が附されます。「源俊頼」「西行」などと書かれた人名それ自体は信頼できない例が多いのですが、多くの書画を見てきた鑑定家の眼はそうは軽んぜられないようで、附された人物の時代と書とみて納得されるものがほとんどです。

書写された時代を知ること、その書物や断簡の性格や価値を知ることでもありますが、時代による書風の変化やその料紙の製法の時代差など、書物の構成要素の歴史の変遷についても多くの知見が積み重ねられてきました。近年では科学的分析も行われています。料紙の化学的成分析、蛍光X線による金字写経の成分分析、放射性炭素(C¹⁴)年代法による料紙の年代測定などが試みられており、これらの分析方法により従来とは異なる理解が示されることもあります。最近も驚くべき報告がありました。平安時代後期に書写された名筆とされていた民部切(古今和歌集断簡)が、江戸時代に作られた料紙に書かれているという測定結果が示されたのです。俄かには納得しがたい結果に、測定方法に問題はないのか、分析対象自体が偽物であったのではないか、など様々な疑問も頭に浮かびますが、まずは、従来示されてきた理解を整理し、新見との間の調整を行った上で測定結果に向き合うことが求められるように思います。書物を知るための挑戦はなおも続きます。

(海野圭介)